

---

# 17年のラブレター

ナカジマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

17年のラブレター

### 【著者名】

ナカジマ  
ナカジマ

### 【ISBN】

N8571G

### 【あらすじ】

17年前の純粋な恋愛。携帯もポケベルさえも無かつたあの頃。アナログがもつひたむきさ。今、30代の人にはさげます。

## 高校2年生（前書き）

この物語は事実がもとになつております。

事実にモトヅクおはなし。

伊藤君は某市内で最も学力が低い普通科と噂される“北高校”略して“北高”（・・・あまり略されてない。）に通っていた。唯一のいいところは

ジヨシ

の比率が高く、7：3と高いところだ。ジョシ専用クラス。いわゆる「女クラ」があつたくらいだ。

伊藤は特にオコトマエでもなければヤンキーだったわけじゃないが、いわゆる。ソコソコアソコなポジションだった男だ。校内でも田立つ方だつためにタマに下級生から

「センパイイハ」

「センパイ！一緒に写真撮つてください～～」  
「お声掛けがあつたよ。よくありがちな“アレ”だ。

七

「センパイー！」の質問に答えてください。」

と云ふながらそつと渡されるトガ!!。

お・・・せんぱいは付き合っている人いますか？

せんぱいの好きな色はなんですか？

せんぱいの好きな髪形は？

e t c . . .

今、思い出してもうらやましい・・・といふかネタマシイ。

でも、伊藤は意外に真面目な奴で「好きな女以外は興味ねーな。」とよく言っていた。

・・・スカシタヤツダ。

中学からの友人で鈴木ムネオ（後に大学6浪。<sup>デブ</sup>通算36校に落ちる）という偉業を達成する。本名だ）、<sup>デブ</sup>本田と健<sup>オレ</sup>と毎日のように、とうか、毎日つるんでいた。

時は1991年。高校2年生であった。。。

この4人は本田を抜かしてみんな陸上部に所属。毎日のように練習にいそし・・・んではいなかつた。毎日、体育館に勝手にバレーコートを張り、バレー部のジョシに罵倒を浴びつつ、弓道部の後輩（かわいい子が多かつた。しかもハカラ姿で2割増）にちょっかいを出す日々であった。

一方、本田は何をおもつたかボクシング部に入部していた。そう。<sup>デブ</sup>軽なデブだった。

グローブになりたいのか？

ところオレの心配をよそに、<sup>デブ</sup>本田は頑張っていた。当の伊藤はなんでもソソンソソジーンス男。でも、好きなジョシには全くの

『ダメ男』

であった。

伊藤は3年間ダイスキだった女の子がいた。

同じ部活の短距離をやっていた加奈ちゃん（乳大）特にかわいいわけじゃないが、いつも笑顔でいる明るい子だった。笑うとき、顔全体を使い切るように笑う笑顔だった。

短距離を走るといつも「ブルルン」としていた。健もソソは気になつていたのは言ひまでもあるまい・・・

加奈ちゃんの友達で佐藤さんという子がいて、この一人はいつも一緒にいた。同じ短距離でおかつぱっぽい髪型が印象の子で3日につづくペんは教科書を忘れて健に借りにきていた。佐藤さんは人間に与えられた“忘れる”という機能をフルち・・活用できる女の子だった。

ウチの高校はバカ高だけにヤンキーが多く、俺らが一年生のころの三年生が特に怖くてショッチャウ喧嘩があつた。校内での派閥と近くの工業高校とよくもめていたのだ。その中でも比較的話しやすい先輩がいて、あるとき先輩が血だらけになつて部室にやってきた。

ボロボロられたらしい。

俺ら一年が先輩を保健室に連れて行く時に加奈ちゃんに見つかった。その姿を見て加奈ちゃんが顔面蒼白。ボロボロ涙を流しながら先輩のところに走ってくる姿をみて

「加奈ちゃんに好きな人がいる」

と俺らは気がついた。

北高は2両編成の単線の電車がメインの通学手段だ。ただ、ものすごく遅くて、自転車と勝負しても負けるくらいだ。だって、次の駅が見えるんだもん。遅くもなるよ。。。

帰り道

伊藤「アレってさー、やっぱり加奈ちゃん好きってことだよね?」

健「そうでした。心うみても。」

伊藤「・・・」

健「・・・?ナニ落ち込んでんの?オマエ。加奈ちゃん好きなの?」

と聞いてみた。伊藤はプライドの高い男で好きな女とか絶対にいわない奴だった。だから期待もしてなかった。

伊藤「・・・絶対いひな」

健「！？……わかつてゐるよ

ここで伊藤の気持ちをはじめて聞いた。誰にも言つてなかつたに違いない。今日のことがショックで思わず口走つたらしい。

この日を境に俺らは仲良くなつていった。

・・・先輩が卒業して俺らが2年生になつてハジメテの後輩がデキタ！

「先輩！」

言われてキモチイランキング上位常連のセリフだ。もちろん、モーソーのなかではかわいいジョシに言われているのはいつまでもあるまい。

部活にも後輩が出来て顔見世の日がキタ

鈴木「陸上部に入つてくる奴なんかオッパイも筋肉だぜ？期待すんなよ～」

伊藤「……ソーとはかぎんねーだろ。「ちょっと怒り氣味？

健「ん～（3人だと6パイか・・・）」

新入生が顧問に連れられてやつてきた。

伊藤鈴木健「！？！」

健「あれ？結構かわいくない？特にあの一人」

鈴木「あけみちゃんとナナリちゃんだろ」「

伊藤「なんで知つてんの？お前」

「だつてお前ら昨日途中で学校フケたろ？そんとき挨拶に来たんだよ。よろしくおねがいしま～す～～って。」

健「んあ～！？だつてさつきお前、期待スンナ！とか言つてたろ！」

「・・・だつてそのほうが面白いじゃん。お前らの反応。オレをカラオケ連れてかなかつた罰だ」

（・・・コイツ。後でバトン渡すフリしてヤツテヤル！）

健と伊藤がアイコンタクトできた貴重な瞬間である。

バトンパスの練習でバトンが凹むほど衝撃を与えた後、歓迎会ということで鈴木の家に新入生から先輩まで集まる事になった。当然、酒盛りである。新入生のなかには酒がはじめてに奴もいるだろう。

新入生歓迎会。総勢20人ほどであつつか？

ソコにはあけみちゃんを狙う鈴木と、加奈ちゃんと仲良くなりたいが、なれない伊藤、近くにジョシがいるだけでモーソー炸裂氣味の健の姿があつた。。。

？？？

ナンダ？

意外にもあけみちゃんの鈴木を見る目が輝いている。

「鈴木センパイって足速いんですねー？」

「うーーそうなのだ。コイツは足が速いのだ！陸上部では足が速い事が顔の良さよりも優先するのだー！」

・・・オレもアッチの速さなら、秒台も切れるのに。。。

オレの残念な比較をよそに、何となくハイムードを感じる。・・・  
ヤバイ。阻止しなければー！

「でもこいつ電車でハナゲ抜く男だよ？一本抜いた時の衝撃で他の  
おとなしくしていたハナゲ達が束になつて顔を出すような男だよ？  
しかも、そのハナゲを電車の椅子に植えるんだぜ！」

「キヤハハハ～ センパイおもしろ～い 」

・・よしー

「健……必死だな。」

あけみちゃんは本気で面白がっている……

「えー……ヤダー！」

的ナ反応を期待していたが、ムダに好奇心を煽つてしまつたようだ。こんな状態のジョシは何を言つてもムダだろう。フト、伊藤が気になつて伊藤を探す……

・・・?

ビミョーなポジション取りをしている。常に加奈ちゃんの近くにはいるのだが必ず間に一人挟む感じだ。効果のなさそつなマンマークを敢行中であつた。

・・・ケナゲだ。伊藤、ケナゲだな・・・泣けてくる。極度の照れ症な伊藤には“ギリ”のラインだらう。ハナゲ鈴木はほっておき、少し助けてやろうか。

「加奈ちゃわわ～ん 加奈ちゃんはどんな男子が好きなの？」

オレはこういつたテンションで行く事に全く抵抗はない男だ。両親に感謝したい。しかし、当方の意図を図りかねた伊藤はムツとしている。

「へつ！？・・・健ちゃん何言つてんの？」

「やつぱり引つ張つてもらいたい？それともドーンと『俺こいつ来てー！』的な男子タイプ？加奈ちゃんが！」

「……なんで男子のまつなのーうへん、やつぱりある程度はヨーデして欲しいなー」

加奈ちゃんはいつも全体的笑顔ではなく、ちょっとハニカミ氣味な笑顔を見てくれた。伊藤はダイブ食いついてきてる。

「へ～そーなんだ。あ～オイ！おとうつーいや、伊藤一結構、オマエモーじゃねーの～」

最初は意図を図りかね、何言つてんだこいつは……的な田線の伊藤がやつと俺の意図を察したらしい。伊藤はカコンは悪くない。

高校生活2度目のアイコンタクトがされた瞬間だった。

「・・・どうちか？と聞われたらモードだね」

一度もジョント付きた事もない伊藤はさうと呟いてのけた。モードの中ではやうなものだつ。

「やうだよな～伊藤は長崎屋で迷子になつやうな俺の手を引いてくれるモンネ」

「健ちゃん迷子になるの？・・・伊藤君も大変だね

「やうなんだよ。コイツを一勝手にいなくなるからさ。みんなで遊んでる時にもいなくなつてモード内放送かけてもらつたことがあるよ・

・「

「あーあつたね。ロベルト事件でしょ。」

「アハツ！ナニそれ？」

「健がまたいなくなつたつーからさ、俺の中の何かがウズキだしてさ。健をブラジルからの留学生だつて受付の人に嘘ついて呼び出してもらつたんだよ。」

「鈴木もノツチャつて、受付の人に「ロベルトケンバツチヨでお願いします」つて真顔で言つてさ、受付の人もさすがにそんな奴イネーだろ風に思つたらしいけど呼ばないわけにいかなくて

「清明町からお越しのロベルトケンバツチヨ様～ロベルトーケンバツチヨ様～」

つて呼んでたよ」

「信じらんねーと思わない？スゲー恥ずかしかつたよ・・・俺が来た時の受付のオネーさんの顔。100%日本人じゃん！！的ナ顔してたもんね！まあ、俺はオネーさんのステキな笑顔が見れたから良かつたけど。」

「ハ～・・・ハ、おなか苦しい・・・みんなバカだね～」

その頃、鈴木は

「ほり！筋肉触ってみ！ほりー。」

・・・」こいつ、17歳にしてオヤジ技をモノにしてやがる。思えば後の6浪という偉業の片鱗であった。

何となく加奈ちゃんと話せるようになつてきた伊藤は置いてゆき、俺は何となくコシップをしながらかわいい後輩に

“気の利くやれっこセンパイ”演出

に勤しんでいた。あわよくばそれをみた後輩の女の子に手伝つてもらい、仲を深めるチャンスだ。しかも、同時に先輩にも好意的に捉えてもらひえるといつ画期的な作戦だ。

「健ちゃん手伝つよ」

!!

キタカ！？俺の時代がつ！

「ん。ありがとう。」

しまつた。。佐藤か・・・ポイントを誤つたな。コイツも普段ツンツンしてなければ結構可愛いんだけどな・・河岸を変えるしかあるまい。佐藤は忘れんボさんだが、普段はツンツンしているクセに感情の起伏が激しいという、ナニを考えているかわかりにくいジヨシだったのでチョット苦手だった。

「健ちゃんつてさ、みんなのトコにこつてるよね？周りに氣を使つ

てないで自分も飲めば？後輩も健ちゃんと話してみたいと思つてゐる  
と思うよ」「みんな

いい奴じゃないか！！意外に！ただのメンドクサイ忘れん坊さんじ  
やないな～！

「そーかな～。ほり、せめて俺が片付けしとかないと先輩に怒られ  
るしな」

2「上の先輩はオッカナカツタが1「上は愉快な先輩ばかりで全く  
怒られた記憶が無かつた。2「上の先輩の下だからこいつになつた  
のかも知れないが。

その日は皆ソレゾレの思惑がソコソコの結果を出してのお開きだつ  
た。鈴木の家から一文字のチャリで帰る途中にアルコールの入つた  
頭で春の夜空を見上げてみた。

サラリーマンのオヤジ達がお酒を飲んで帰る時もこんな気持ちなの  
かも知れないな・・・気持ちいいもん。少しフワフワした気分でふ  
らふらしながら帰つた。オヤジが酔つ払つても許してやるうと思  
いながら。

その後、鈴木はあけみちゃんと付き合つ事になり、みんなに「ヤツ  
たら教えろよ！！」と言われつつ、彼女のいない先輩の地味な“練  
習メニュー追加”のいじめをこなしていた。

鈴木は1年生の後半から急速に400mのタイムを伸ばしており、

県大会の準決勝がMAXの状態を抜け出す希望の星と変貌を遂げつあつた。400mは非常に苦しい距離だ。酸素は300mまでしかもたず、最後の100mは気力である。スゲーキつい。

鈴木の1年の時のタイムは55秒で投擲の俺より遅かつた。でも、54秒を切つたあたりから何かをつかんだらしく急速にタイムを縮め、今ではウチで一番速い先輩の51秒と並んでいた。だから、先輩の追加メニューも期待値込みだつたに違いない。

伊藤は100～200mの短距離で成績はソコソコ。俺は目立たない槍投げで可も無く不かもなく、非常に地味な存在であった。

100×4のリレーでは何気に俺ら3人が入つていた。100mのタイムはこの3人が良かつたから。俺も短距離への転向を進められていた。もう一人は後輩の「タクヤ」。結構速い。俺は勝てなかつた。タクヤに勝てなかつたのも短距離に転向しない理由だったかもしれない。コイツは天パのサル顔のくせに「女にモテル」と豪語していた生意気な奴だつた。

猿の惑星に出てきたコーネリアスにそつくりだつたので「コーネリアス！」と呼んでもあげていた。わざわざビデオを貸してやつてまでだ。

伊藤はぎこちないながらも加奈ちゃんと微妙にいいところまでこぎつけていた。しかし、マダマダ危うい。累卵の危うさだ。しかも如何せん“不器用”である。その点タクヤはすんなりいける奴だつた。やるじやねーか。しかも照れ症である。伊藤はその想いを上手く伝えきれないでいた。

俺から見ても・・・意外にいけんジャネーーー♪と思えるくらいにその関係は発展しているように見えた。その頃には伊藤と俺は完全に心を許していた。もちろん、鈴木とも仲が良かつたが伊藤とは特にウマが合つた。俺らはよくカラオケに行つた。毎日ともいえる位。そのカラオケで伊藤は

「加奈ちゃん！－ダイスキだー！－！」

と叫んでいた。

そんなこんなで2年生の夏は過ぎてゆく・・・

俺らが3年生になつた頃には加奈ちゃんもさすがに伊藤の気持ちに気がついていて、それでも時折、満更でもない満面の笑み、あの顔全体で笑うようなステキな笑顔を見せていた。

その頃の俺は全く眼中になかつた後輩の精一杯のアプローチを受けていた。

・・・なんでこんなのバッカシに。。。とは思いつつも、自分に想いを寄せてくれる貴重な存在を断ち切ることが出来なかつた。

この後輩、砲丸の選手だ。自分と似ているから砲丸を選んだのかもしない。類は友を呼ぶらしい。

俺も投擲だからどうしても顔を合わす。キマズイ。

とにかく、ウチの北高陸上部にもジョシマネージャーがいる。しかも結構かわいい

しかしながら暗黙の了解で短距離／中距離用と決まっていた。

・・・くそっ！俺だつてリレーは出るの！

このときほど投擲のマイナーさを恨んだときは無かった。

Jのジヨシマネの中で一際オトナっぽい

「J!!」

がいた。大学生と付き合っているという噂があり「ヤツティル」との評判であった。田舎の高校ではそれだけで異質な存在だったのだ。しかしながらウマソウな身体ツキをしていた。長めのストレートに細めの腰。胸は小ぶりだが色白なのが一クタラシイ。俺はこのJミとは話しやすかつた。

JのもつてくるタオルはほのかにJの匂いがした。

俺はJミのタオルが好きだつた。

この頃になると

鈴木 ラブラブ

伊藤＆加奈 両想いつぽいがお互い何も出来ず

健 健  
オレ  
ダルマスタイル  
後輩の猛烈アピールにより他のジョシには一定の距離を置

かかる。

の構図が出来上がっていた。季節は3年生の秋を迎えていた。

最後の大会で鈴木が次走者のスパイクに足を引っ掛けてしまい、散々な結果となつた。そのメンタルを立て直す事ができず個人種目も散々だつた。俺たちの夏は終わつた。

「お前ら免許どーする?」みんなに聞いてみた。

3年生は冬休みに入ると免許を取りにいけるのであつた。一部の生徒は夏休みから行つていたが。

「あー? 取りに行くに決まつてんじゃん。あけみどドライブ行く約束したし」「

・・・いつのまにかヨビステに格上げシテヤガル。ヤツたか!?

「どーに行くのお前ら。吾妻? ケンコウ? 吾妻は教官が厳しいらしーぜ」「仲の良かつた先輩に聞いてきたらしい。伊藤は女子の先輩とは仲が良かつた。照れ屋さんの伊藤がなんで???と思ひ、聞いてみたことがある。

伊藤曰く

「年上は女じやねーから

言つじやねーか童貞がつ!・・・ま、人のこと言えないと。

「うーん。でも吾妻のほうが近いし、親父の知り合いがいるからな  
」

そうなのだ。吾妻は評判悪いが親父の知り合いがいるので“オマケ  
”してもらえるかも という甘い期待を持っていたのだ。ボク。

「ケンコウはクラウンらしいよ。教習車。乗りたくねえ？クラウン。  
あ～あ、クラウンであけみヒヂライブしてーなーあ・・・

くつークラウンの広い車内をフル活用か！？ハナゲを電車に植林し  
ていた男とは思えん・・・

「オレはやっぱし吾妻だな。親父の知り合いにオマケしてもらえる  
かもだし。」何となく、ちょっとした口ネを自慢したくなってしま  
う。

「え～汗、俺、ケンコウの方がチケーもん。。」そんな鈴木を軽く  
スルーし

「伊藤は吾妻の方がチケーべ？一緒にいくべよ」

「うん。そーだな。鈴木もいーからこいよ。俺らがイネーとさみし  
ーだろ？」

「なんだな。そーすつかーーんじやー今度の土曜日に申込いかねえ  
？」

以前は週休1日だったが、俺らが3年生になつてから隔週2日の休みが導入されることになったのだ。みんな「ずるくね?」「俺たちしかねーべ」と言つていた。

家の方向が違う鈴木と別れて伊藤と2人で帰ることになった。いつも2人で激安ラーメン屋

「キンコン館」

でミソラーメンを230円で食つていいくのが習慣だった。しようと  
は190円だったが、高校生の食欲をもつてしても不味くて食えなかつた。。まあ、それでも金のない俺らには充分だった。

なんといつても“漫画”があつたのがデカイ！――

俺らはけっしてウマイとは言えない!!ソラーメンをかきこみながら

「……オマエが、加奈ちゃんどーすんの? いーかげん告白したら?  
」

「……キンコン館ではやめよーぜ。。。周りに人居るじゃん」

「おー。そだな。んじゃ、コノ食つたら真淨田のハトにえむくれに  
いーーぜーー！」

「・・・オマエ、ハト好きな。なんで?」

「バカか？伊藤。あの首のフリつぱり！見ただことねーのか？歩く時何回振つているかわからんほどのハイスピードだぞ！」しかも、歩

「スピード運動型だーおれらへー一秒間に16回は振ってるねーまさにこー6ビートー！」

「・・・」

「止めたいたいね。。あのクビ。あのクビリズムを止めたらどうなるのか？アレはリズムだろ？人間で言うところのウデフリに値するわけだ。でも、人間はウデ止めても動けるじゃん。そこで湧くだろ？」  
疑問がつ！ふつー

「止めても歩けるのか！？ってな

「・・・ま、まあな

「つま～しー！食ったぞー！行くぞー！」

「・・・入りすぎだから。気合。何しに行くか覚えてるか？」

「おつけ」

人を魅了せざるにいられない満面の笑みとともに俺はお寺に向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8571g/>

17年のラブレター

2010年12月30日14時18分発行